

インフルエンザ脳症、薬害の可能性

「インフルエンザに伴う急性脳症は、解熱剤など薬が原因である可能性がある」と近藤誠・慶応大医学部講師が報告し、イギリスの医学専門誌「ランセット」に掲載された。脳症の詳しい原因は不明とされるが、欧米にはまれなのに日本で多発しており、薬を多用するわが国での「薬害」との見方。

この脳症は、インフルエンザに感染した子供が急激に意識障害などを起こす病気で、死亡率が高く、重い後遺症を残す場合も多い。

近藤講師は、厚生省研究班（当時）が1999年に「一部の解熱剤と、脳症による死亡に関連がある」と報告したことや、風邪の子供が解熱剤や抗生物質、鼻水止めなど数種類の薬を飲んだ後に脳症で死亡した例が複数あることを指摘。この脳症が日本に多いのは、「風邪でも多くの医師が強力な解熱剤を処方したり複数の薬を出したりすることで、体の免疫物質の働きが過剰になり、脳症を引き起こしているためではないか」としている。

インフルエンザ脳症 一部の解熱剤、子供には使わないで

インフルエンザの本格的な流行シーズンを迎えた。幼い子供を持つ家族が気をつけなければいけないのが、**インフルエンザ脳症**。ごくまれな病気だが、かかった場合の死亡率や、脳性まひなどの後遺症が残る割合は高い。専門家は「脳症の兆しの『サイン』を見逃さないで」と呼びかけている。

インフルエンザ脳症は、インフルエンザによる急な高熱の後、突然、けいれんを起こしたり、意識障害を起こす。6歳以下の子供に多い。ウイルスが脳に入り込むのではなく、ウイルスと戦う免疫反応が激しくなりすぎて、脳が腫れたり、血管や臓器が傷ついて発症するとみられる。日本で多発し、欧米での報告は非常に少ないのも特徴。治療法は未確立。

また、森島恒雄・岡山大教授（小児科学）によると、98年暮れ～03年春に国内で704人が発症し、151人が死亡した。インフルエンザ流行の規模が大きいほど、脳症の患者も多い。脳症の死亡率は高いシーズンでは約30%になる。脳症患者の約4分の1に障害が残る。

警友会けいゆう病院（横浜市）の菅谷憲夫・小児科部長は「脳症患者は、小児インフルエンザ患者の約1万人に1人。死亡は約4万人に1人で、非常にまれだ」と指摘。ワクチン接種については「インフルエンザそのものにかかりにくくなり、発熱などの症状も軽く抑えることが期待でき、脳症予防にも有効だ」（菅谷部長）という。

また、死亡したり障害が残った脳症患者を調べてみると、一部の強力な非ステロイド系解熱剤（メフェナム酸、ジクロフェナクナトリウム）を使用した症例が多いことが分かる。

これらの解熱剤の使用が重症化の要因とみられ、森島教授は「ライ症候群（ウイルス疾患の子供がかかる脳症）を引き起こすアスピリンやスルピリンと共に、治療には使わない方がいい」と話す。解熱剤が必要な場合は、より穏やかな作用のアセトアミノフェンを使用すべきだという。